

連載

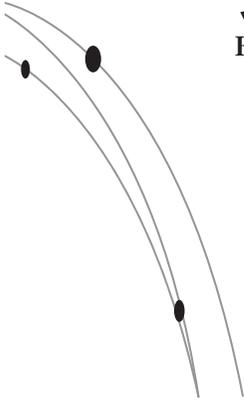
## フィールド・アイ

Field Eye

オックスフォードから——②

立正大学 西岡 由美

Yumi Nishioka



### 〳 オックスフォード大学の魅力

2020年4月末に渡英したものの、ロックダウンの影響でオックスフォード大学が一時閉鎖していたため、アカデミックビジターとして正式に登録できたのは、10月のMichaelmas termになってのことであった。大学のIDカード取得後は、大学の各種セミナーや図書館へのアクセスが可能となり、渡英前に伝え聞いていたオックスフォード大学の素晴らしさを感じている。

所属カレッジから毎週届く通知によると、各カレッジ・研究所主催の公開講演会やさまざまなランチタイムセミナーが多数開催されており、自分の興味に応じてそれらに自由に参加可能である。例えば、私の受入れ先であるSt Antony's Collegeにはアフリカ、アジア、ヨーロッパ、日本、ラテンアメリカ、中東、ロシア、ユーラシアに焦点を当てた7つの研究センターがあるが、それぞれの研究所が毎週定期的にセミナーを開催している。コロナ禍のためすべてオンラインでの開催であり、早期に対面もしくはオンラインと対面の併用になることが期待されるが、開催場所への移動が不要で自宅から気軽に参加できる点、世界各国のより多くの参加者と幅広い議論が行える点は魅力的である。学術大会のオンライン開催を含め、世界各国に在住する研究者間での交流方法が大きく変化していると感じる。

オックスフォード大学で研究する魅力の一つに、英国で大英図書館に次ぐ規模を誇るボドリアン図書館の存在がある。オックスフォード大学のすべてのカレッジは独自に図書館を所有しているが、それ以外にもボ

ドリアン図書館グループ（以下、ボドリアン図書館）があり、大学のIDカードがあれば自由に利用できる。ボドリアン図書館は、中央大学図書館を含む28の図書館からなる図書館全体を指し、オックスフォード大学の蔵書、電子ジャーナル、データベース、機関リポジトリなどは、同図書館の図書検索システムであるSOLO (Search Oxford Libraries Online) ですべて検索できる。研究と学習をサポートするために、幅広い電子リソース、電子ジャーナル、電子ブックを購読しており、ボドリアン図書館のホームページによると、SOLOの検索機能により140万件を超える電子書籍と11万8000件を超える論文、および電子法定納本資料の購読コピーにアクセスが可能である。

さらにオックスフォード大学では、豊富なデータベースに加え、それを有効に活用するためのサポート体制も充実している。ボドリアン図書館では、情報検索スキル習得を目的に学期を通してBodleian iSkillsという名のワークショップを提供している。Bodleian iSkillsは、学術資料の検索、アーカイブ資料の入手と利用、EndNote、RefWorks、Zotero、Mendeleyを使った参考文献の管理、脚注や文書の書式設定、著作権の理解と知的財産の管理、オープンアクセス出版と助成団体からのオープンアクセスの要請への対応等といった研究を進めるための基礎的な内容をカバーしており、大学のIDがあれば所属学部、カレッジに関係なくすべて無料で参加できる。また、専門的なサポートが必要な場合には、100近くの専門分野に細分化された担当司書に直接、相談可能である。

私が先日参加した「Data Sources for Research: Discovery, Access and Use」も、Bodleian iSkillsの一つであり、教育学、データベースをそれぞれ専門とする2名の司書が講師を担当していた。参加者は、MBAの学生、政治学専攻の博士課程の学生、比較言語学専攻のポスドク、環境社会学専攻のギリシャからのアカデミックビジター等の8名であり、データベースとデータセットの違いや英国データサービスの紹介といった基礎的な説明から始まり、OECD iLibraryとEurostatを用いた演習が行われた。これらのサイトはSOLOを介することで、研究目的での使用が明確になるとともに、オックスフォード大学が使用料を負担していることから、通常のアクセスとは異なるより詳細かつ豊富なデータが入手可能であることが分かった。

またBodleian iSkillsに関連するものとして、ITラ

ーニングセンターが主催する IT 関連の広範なワークショップがある。Apple iPad によるノートの取り方といった内容から、統計ソフト (R, SPSS, Stata 等)、プログラミング言語 (Python, JavaScript, Julia 等) を用いたワークショップが目的やレベルに合わせて多数用意されている。

本稿で紹介した内容は、オックスフォード大学の素晴らしいの一部に過ぎないが、このように、同大学では大学院生や研究者が研究を進めるための基盤やサポート体制が十分に確立されている。こういった素晴らしい研究環境を垣間見るにつれ、オックスフォード大学の大学院生を羨ましく思う一方、「調査法は大切、でもしよせんは道具」(今野 2015) という提言が思い出される。

研究者にとって、豊富なデータベースは論文執筆の宝庫であるし、多様な調査法を習得することは学術雑誌に論文を掲載する上で武器や盾となるだろう。だが、それだけでは良い論文は執筆できないし、優れた研究者にはなれない。以前オックスフォードで、ある著名な研究者が登壇するセミナーに参加した際に、投稿論文が採択されるまで6年以上の歳月がかかったと聞いた。また別の著名な研究者からも数年間かけて何度も書き直し投稿している論文があることを聞いた。世界的に著名な研究者でさえも論文採択まで6年以上の歳月がかかっていることに素直に驚いたが、それ以上に両研究者ともに、長期間、論文に対するモチベーションを維持できるのは、研究アイデアそのものがどれほど自分にとって魅力的であるか、掲載に至るプロセスで査読者とのやり取りからどのような知見が得られるかだという発言が印象的であった。特に、投稿先の査読者の質に注目する視点は、斬新であった。良い論文を完成させるためには、その基盤となる研究環境や調査法も重要であるが、それ以上に研究アイデアとそれを完成させるためのプロセスが鍵となる。

また、セミナーに参加してもう1つ感じたことはいわゆる「投稿戦略」である。「戦略」ではなく、この雑誌に載せたいといった「想い」でもあるかもしれないが、前述の両研究者は投稿先に対して明確な戦略を練っていた。こうした戦略は英語論文の書き方に関する書籍(中谷 2020など)を読んで独習することもできるかもしれないが、「なぜそのジャーナルを選んだのか」「そのジャーナルに投稿する際に気を付けることは何か」などについては、なかなか聞く機会がなく、大いに刺激を受けた。オックスフォード大学の研究業績に対する評価は他大学に比べると緩やかであると聞いているが、テニユア獲得のために「スター」(遠藤 2017)を気にする英国ならではだと感じた。少しずつ日本の経営学関係の学会でも海外ジャーナルに掲載されるためのセミナーが開催されるようになってくるもの、その数は少ないように思う。大学の人的資源管理論の授業でグローバル化の影響を説明している一方で、私自身のグローバル化はまだ進んでおらず、投稿先のバラエティも少ない。今回の在外研究を私自身のグローバル化の足掛かりとしたいものである。

#### 参考文献

- Bodleian Libraries "Books, Journals and Databases" University of Oxford. <https://www.bodleian.ox.ac.uk/collections-and-resources/books-and-journals> (最終閲覧日: 2021.6.11)
- 今野浩一郎 (2015) 「調査法は大切、でもしよせんは道具」『日本労働研究雑誌』 No. 665, p. 1.
- 遠藤貴宏 (2017) 「英国のビジネススクールと「スター」の話」『組織科学』 Vol. 50, No. 3, pp. 104-105.
- 中谷安男 (2020) 『経済学・経営学のための英語論文の書き方——アクセプトされるポイントと戦略』中央経済社。

にしおか・ゆみ 立正大学経営学部教授。主著に『多様化する雇用形態の人事管理——人材ポートフォリオの実証分析』(中央経済社, 2018年)。人的資源管理論専攻。